



ひるねでらり

あまのじやく



文 藤原 遥香  
絵 松浦 瑞恵



むかあし、むかしのお話じゃ。

尾道に浄泉寺ゆうお寺さんがあるじやろ。あすこの本堂は尾道で一番大きゆうて、縁側が広うてな、夏になると、ひんやり涼しい風が縁側に吹き込んで昼寝するんにびったりの場所じやったけえ、みんなから「昼寝寺」って呼ばれて親しまれとったんじや。

じゃけど、昼寝寺にはいつ頃からか困ったもんが住みついてしもうたんよ。

人にイタズラするんが大好きな天の邪鬼じや。

四匹おつてな、昼寝しようる人らあに、しよつちゆう悪さはあしようた。

ぞうりを隠したり、ゲタの鼻緒をちぎったり、縁側ドタバタ走りまわって騒いだり、勝手に木魚ぼくごを使って、寝よう





る人の耳元でチャカポコ叩いたり、墨と筆で顔に落書きしたり、上に乗って飛んだり跳ねたり。子どものほつぺた捻り上げて起こして泣かせてみたりしてな、そりゃあイタズラ三昧で迷惑ばあかけようたんじゃ。

せつかくの涼しい場所で昼寝ができんようになってしてもうて、みんな困つとつたんよ。

ある日、イタズラにたまりかねた腕つぶしの強い若者わかもんらが束になって、天の邪鬼を捕まえちやろうとしたんじゃけどな、天の邪鬼は小まあ上にすばしっこくて捕まりやあせん。

結局、若者らあはからかわれるだけからかわれて、天の邪鬼を捕まえることができんかつたんじゃ。





悔しゅうて仕方ない若者らあの中に、一人の石工見習いがおった。

石工見習いは、自分らあだけじゃあの天の邪鬼どもは手に負えんと思うてな、腕が良うてみんなが頼りにしとる石工のかしらに何かええ知恵はないかと相談したんじゃ。

石工のかしらは、たくさんの人が困つとるゆう話を聞いて、

「そぎゃあに人に迷惑ばあかける天の邪鬼は、こらしめちやらんといけんのをう」

てゆうてな、天の邪鬼をこらしめる方法を考えたんよ。

さつそく、石工のかしらは大きゅうて立派な石を取り寄せて、それをガリガリゴリゴリ削って何か作りあげた。

そして、作った物を若者らあに担がせて、昼寝寺の境内まで持って行かせたんじゃ。

「苦勞さん。こけえら辺でええじゃろう。下ろしてくれ」

石工のかしらの合図を受けて、若者らあは石を下ろした。

「ああ、しんどかった。なんじゃ、やけに重たあ石じゃったのう」

「ほんまじゃなあ。でも、これくらい重とうないとな」

「天の邪鬼どもが持ち上げて悪さしたらえらいことじゃえのう」

「でもまあ、あの小おまい天の邪鬼にはこの石を担ぐどころか、持ち上げることもようできんじゃろ」

そうゆうて若者らあがドツと笑うのを、境内の隅っこで聞いたったんは、その小おまい天の邪鬼らあじゃった。

「なんじゃ、あいつら。こないだわしらが散々からかつてやったやつらじゃにやあか」

「腹立つのう。わしらが本気になりやあ、あれくらい軽々と持てるわ！」

「そうじゃ、そうじゃ。なあ、あの石を担いであいつらにぶち投げてやらんか？」

「面白そうじゃな！」



天の邪鬼らあは顔を見合わせるとぎやら  
ぎやら笑つてな、石工のかしらと若者らあが  
おらんようになったのを見計らつて石が置い  
てある方に駆けよつた。それで「いっせーので」  
ゆつて声を合わせて力をいれたんじゃ。

じゃけど、石はなかなか持ち上がらん。

「おおい、もおちいと気張れ！」

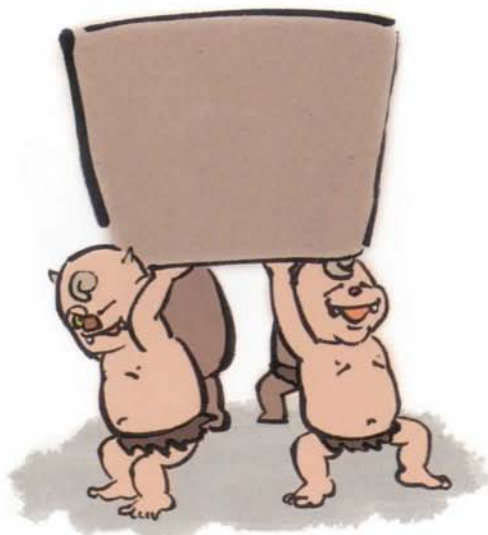
「おまあこそ、カいれろ！」

「ケンカすんなや。ええか、もう一遍いくぞ」

「いっせーので！」

今度は、何とか持ち上げて、ようよう担ぎ  
あげたんじゃけど、自分らあより一回りも二  
回りも大きい石じゃええな、支えとる腕や脚  
はガクガクブルブル震えてしもうとつた。

じゃけど、担ぎあげられたんが嬉しかった  
んか、天の邪鬼らあはぎやいぎやいはしやい



だ声を出してな、

「なんじゃ、見た目よりずっと軽いぞ」と強がってみせたり、

「わしらにかかりやあ、こんくらい朝飯まえじゃー!」とおらんだんよ。

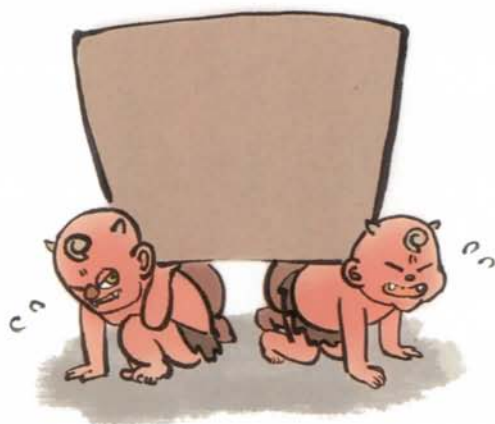
と、急に担いどった石がズシッと重とうなつた。

石は、どんどん重うなつて、あつとゆう間にどれか一匹がちいとも動けば支えきれんでペチャンコになるくらいになつてしまつたんじゃ。

いったい何が起きたんか、天の邪鬼らあにはさっぱり分からん。

「なんじゃ、なんじゃ!」

「いきなり、重とうなつたぞぞ!」



ぎやわぎやわと声あげて慌てようると、とつぜん声が降ってきた。

「おい、天の邪鬼、反省したか？」

なんとか首を動かして上を向くと、そこには石工のかしらを始め、たくさんのお人がおった。見るとそれぞれ手桶を持つとる。

実は、石工のかしらにがせつせと作つとつたんはな、大きな石の桶じゃったんよ。

それで、天の邪鬼が石を担ぐんに夢中になつとる間に、あらかじめ計画を説明しとつた、天の邪鬼のイタズラに困つとつた人らあをこつそり集めてな、ぎょうさんの水を一齐に石の桶に注いだんじゃ。

まんまと騙されたことに気づいた天の邪鬼らあは、悔しゅうて悔しゅうて仕方なかった。

石工のかしらは天の邪鬼らあに向かつて「おい。反省すりゃあ、ゆるしてやるぞ。どうする、謝るか？」てゆうた。

じゃけど、素直に反省するんが悔しい天の邪鬼らあは、反省をしようと思へんかったんじゃ。

「嫌じゃ嫌じゃ！ 絶対嫌じゃ」

「わしら、絶対謝らんぞ！」

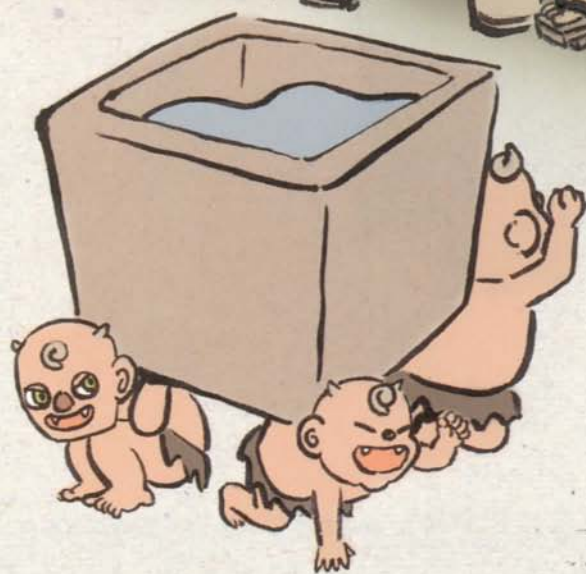
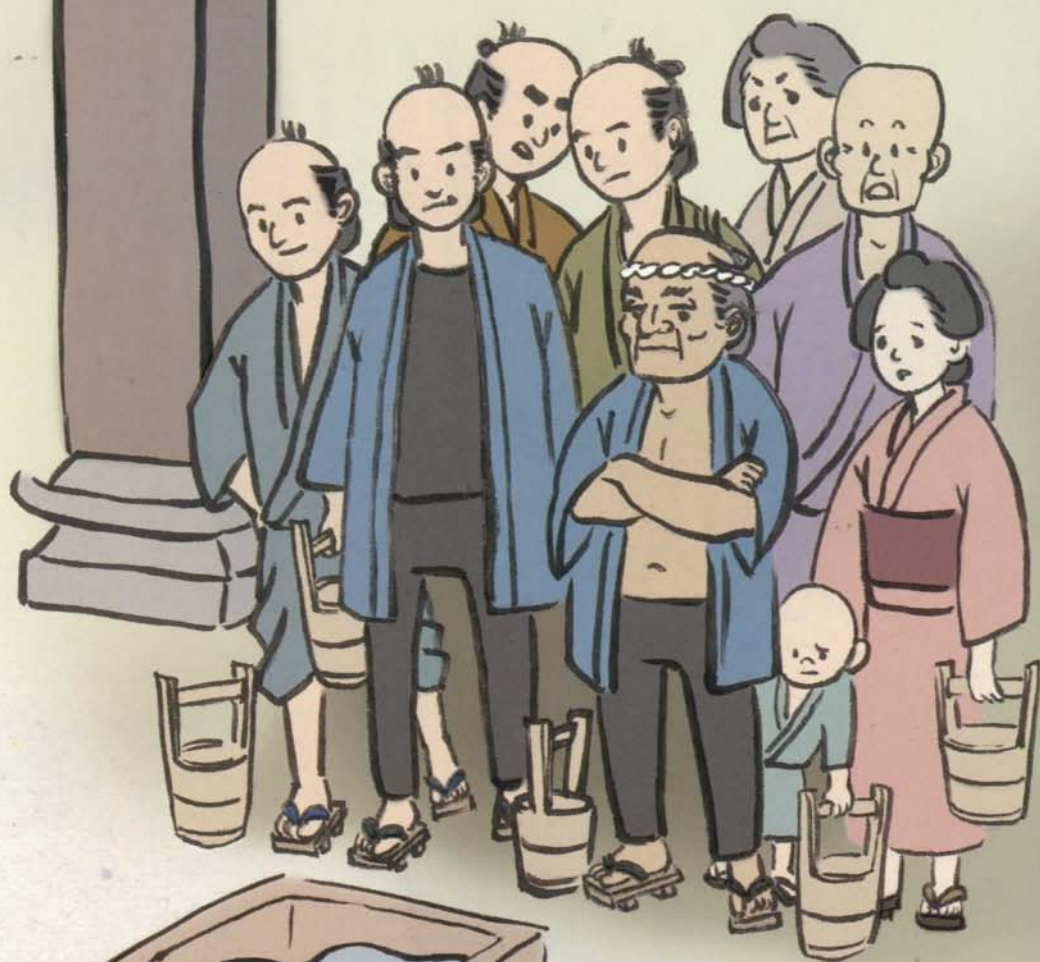
「おみやあ、よくわしらあ騙したな！」

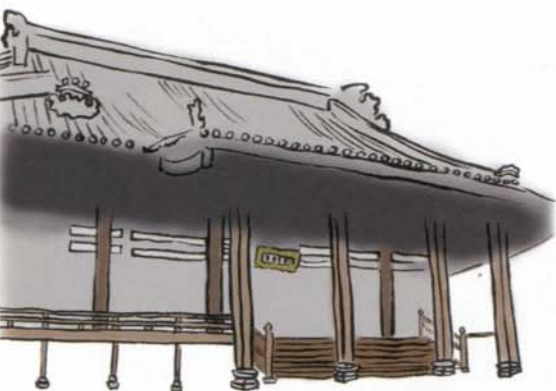
「ゆるさんぞ！」

そうして天の邪鬼らあは、ひたすらみんなに悪態をついて、担いどる石が「重たあ、重たあ」ゆうてゆうてゆうて、ぎやいぎやい喚いとるうちに、いつの間にか、なんとまあ石になつてしもうた。

それ以来、浄泉寺はもとのように静かになつて、みんな安心して昼寝ができるようになったんよ。







今でも昼寝寺にはその石の桶があつてな、  
今じゃあ雨水をためとく天水桶に使われとる。  
もちろん、四匹の天の邪鬼らあは桶を支え  
てカチンコチンに固まっつとるまんまじゃ。  
でもな、石になつてしまつた天の邪鬼らあ  
じゃけど、よう耳をすましてみると、時々、  
「おおい、カあ抜くなや、潰れるぞ」とか「重  
たあよう」とかゆう声が聞こえるんじやつて。

